

## 映画館



クロアチアの城壁都市ドブローニクで。観光客が往来する中で町の普通の生活が営まれていた。

初めて大きなスクリーンで映画を見たのは、夏の夜の小学校の講堂であった。板の床に莫塵が引かれそこに座った。開け放たれた窓から入ってくる夜風がスクリーンをなびかせ、そのたびに映像がゆがんだ。オープンリールがカタカタと音をたてて回っていた。昭和二十五、六年のころのことである。

昭和二十八年九月、台風十三号が村を襲った。それまで沢山の突っ支い棒でなんとか立っていた小学校も水害にやられ、翌年新しい校舎にかわった。古い講堂は解体され別の場所に移され映画館になった。旧知三村と旧奥名田村が合併して名田庄村が生まれたのが昭和三十年だったが、そのころの話である。

毎晩上映されていなかったと思うが、学校からは月二回までといわれていた。小学生だった筆者は『笛吹童子』や『紅孔雀』を見たのを覚えている。見てはいけない映画もときどき上映されていた。映画が始まる前にニュース映画があった。甲高い声のアナウンサーが少しぎこちなく動く画面を説明していた。

かなりの距離を歩いて通学していた小学校の同級生と村の映画館のことを話していたら、「学校が終わって歩いて家に帰る途中看板をちらっと見て面白そうならまた夜出て

きたなあ」と言っていた。

『名田庄村史（昭和四十六年発行）』によれば、昭和三十年の人口は四八五五人となっている。村の映画館は昭和四十年過ぎまでであった。名田庄村も平成十八年三月二日に消えた。平成十八年一月一日現在で村の人口は二八七七人であった。

しかし、今は映画館のことである。

昭和三十年代には小浜にも、小浜劇場（浜劇）と中央劇場の二つの映画館があった。浜劇は二階建てで二階は斜めの床に畳が敷いてあった。小学生が団体で見に行くと、見ている間にずるずるとみんな下がっていったという。

田舎を離れ学生生活を送っていた昭和四〇年代、映画館はまさに劇場だった。スクリーンの前に大きな幕が下りていた。始まる時、ブザーが鳴って幕がゆっくり上がった。そのときがどれほど待ち遠しかったことか。

入れ替えなどなかったので何回も同じ映画を見ることができた。いい席を確保するため終了前に暗い場内に入り、目と耳をふさぎじっと終わるのを待っていた。映画の終わりを初めに見てしまうほどつまらないことはないのである。

劇場のある場所は何となくそのにおいがした。余所の都市に行っても、駅の周辺やアーケード街でこのあたりにと思うところに劇場があった。名画だけをかける小さな劇場が古びたビルの三階や四階にひっそりとあった。思わぬ昔の映画をやっていて、もうけたと思ったこともあった。

今はシネコンばかり増えた。劇場（というものはばかれるが）の規模は中クラスで、大きくもなく小さくもなく無機質である。映画館のコンビニ化だと思っている。二本だて、三本だてなど望むべくもなく、一回ずつの入れ替えである。始まる前にコマースャルスライドを見せられ、食べ物を持ち込むとかなんとか、マニュアルどおり、うるさいことこの上なしである。

（二〇〇六年三月三十一日）